

柿内三郎記念賞について

公益財団法人倶進会

柿内三郎先生は日本の生化学研究の礎を築いた方であります。ご存知の方も多いとは思いますが、まず、先生が貢献された事柄について簡単に述べさせていただきます。

柿内先生は、東京帝国大学医学部「医化学教室」の教授でしたが、先生は、生物でもない、生理でもない、医でもない、「生」の化学こそ生命現象の基本であると考え、学問分野として「生化学」という言葉を提唱されました。そして、1922年に「生化学者宵の会」という同好会を本郷で始めました。これが「生化学」という言葉が公に用いられた最初です。また、2年後の1924年の日本生化学会の設立にもつながるわけです。医学だけでなく、生物学、化学、工学、農学の分野を包括的に網羅したことは、「生の化学」という基本概念があったからであると思います。医化学教室を「生化学教室」への名称変更も行いました。

さらに重要なことは「Journal of Biochemistry」を1922年に自費で創刊し、第二次大戦勃発によって1944年の終刊となるまで、22年にわたり36巻を刊行しました。先生は「日本人の論文はわずかな内容を冗長に書く傾向があった。これでは進歩しない。世界に通用する論文だけを欧文で書くべきだと」と考えて、多くの人を説得したのですが、積極的賛同は得られなかったため、自費出版となりました。しかし、1950年日本生化学会は「Journal of Biochemistry」を機関紙として復刊し、37巻から継続して今日に至っております。今ではこの機関紙は国際的にも主要な学術雑誌となっていることは、ご同慶の至りです。

先生は「生体膜と生体エネルギー」に関する先駆的な研究業績を残されていますが、「糖質」、「脂質」、「緩衝液」など多数の造語を含め、生化学用語の策定や、数冊の生化学関係の教科書や研究書を執筆されております。

東京帝国大学を1943年に定年退職後は、私費を投じて今日の公益財団法人の前身である「財団法人倶進会」を設立されました。その目的は「本邦における薫育事業を振興し、国家に有用なる人材を養成すること」でした。先生は大学

に在職中から、日本の将来を担うであろう学生の英知を啓発することが必要であると痛感し、教養教育の重要性を考えて、講演会などを開催されておられました。しかし、若者の薫陶は子供の頃に行わないと効果は薄いと悟られ、退職後に財団を設立して幼児教育に邁進しようと決意されたわけです。実際に幼稚園も経営されています。

柿内先生の考えに賛同して、財団の役員となった方々は当時の著名な知識人でした。一部を紹介しますと、理事は桑木^{ゲンヨク}厳翼、松浦^{ハジメ}一、他。評議員には安部^{ヨシノブ}能成、岩波茂雄、小泉信三、田中耕太郎、穂積^{シゲトオ}重遠、柳田國男、和辻哲郎、他の方々がおられました。

しかし、空襲で事務所も焼け、終戦となり、残念なことに戦後は会の活動は休眠状態が続いていました。柿内三郎先生が逝去された後、ご子息で東大物性研の教授だった柿内^{ヨシノブ}賢信氏が理事長となりましたが、依然状況は休眠状態を脱することはできませんでした。柿内賢信氏が逝去された後、以前から倶進会の諸事を手伝っていた私、勝見がこの理事長の役を引き継ぐことになり、多くの人の助けを借りて、倶進会を再出発させることができました。

現在は公益財団法人となり、柿内三郎先生の財団法人設立の当初初の目的を尊重し、助成事業と教養セミナーの開催を主な事業として運営しています。

柿内家は残念ながら男性の子孫がないため、柿内という名前は消滅してしまいました。そこで、倶進会としては設立者の名前を何らかの形で記念として残したいと考え、柿内三郎を記念する賞を設置することにしました。

先ほど述べましたように、柿内三郎先生は日本生化学会としても記憶されるべき方ですので、学会の方にこのような賞の設置を提案し、最初は平成15年に柿内三郎記念研究助成金という形で、そして平成17年に現在のように、柿内三郎記念賞と柿内三郎記念奨励研究賞と改められました。以上が、柿内三郎記念賞設置の経緯です。